

第40号  
2018・6・10発行  
金光教教学研究所

# 金光大神が見たかもしれない「世界」 地図——妄想力はどこまでも……

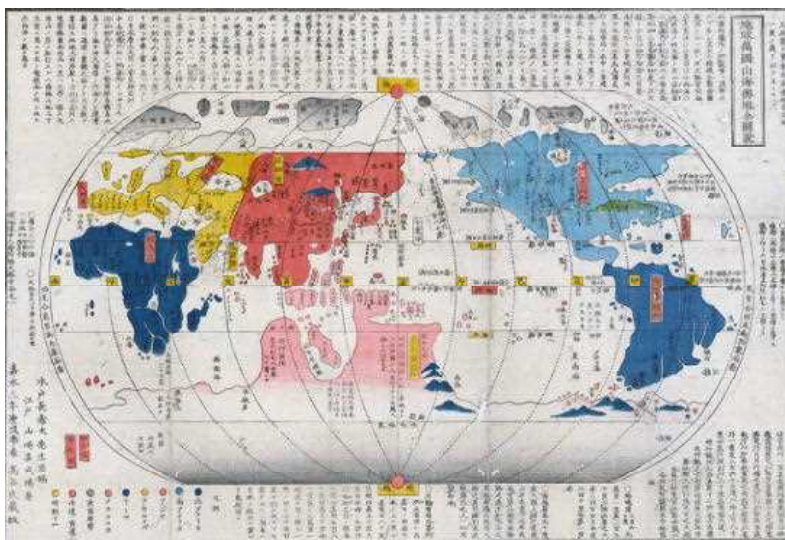
第一部部长 岩崎 繁之



平成二十七年に教団  
に提供された新たな資  
料群には、金光大神直  
筆を含む教祖関係資料  
が含まれている。新資

料の登場は、新たな発見や従来の観点の見直しを促すこともあり得よう。ところで、発見や見直しのきっかけは、何も新資料に限ったことではない。

近年、地域の活性化を目的とした見学ツアーが開催されており、霊地もそのコースに組み込まれることがある。その際、本所も見学先の一つとして施設の説明や所蔵資料の紹介をしている。参加されるのは、一般の方々。毎回、初めて訪れる方々なので、すべてが新しい体験である。一方で、説明する側はその都度遊び心が湧



絵図1 『地球万国山海輿地全国図』(小野家文書、嘉永3年—教祖37歳)

き上がり、その時々に関心を交えつつアレンジしている。数年前、何か目新しい物はないかと資料庫で資料を物色していた時のこと、小野家文書の中に多くの絵図類があることに目とまった。故金光和道師が作成された目録上で、在ることは知っていたのだが、教祖に直接つながりにくいこれら絵図を実際に一点一点手に取ってじっくり見るのは初めてだった。

大小様々な絵図類は、むろん大谷村の測量図関係が多いのだが、中には当時の世相をうかが

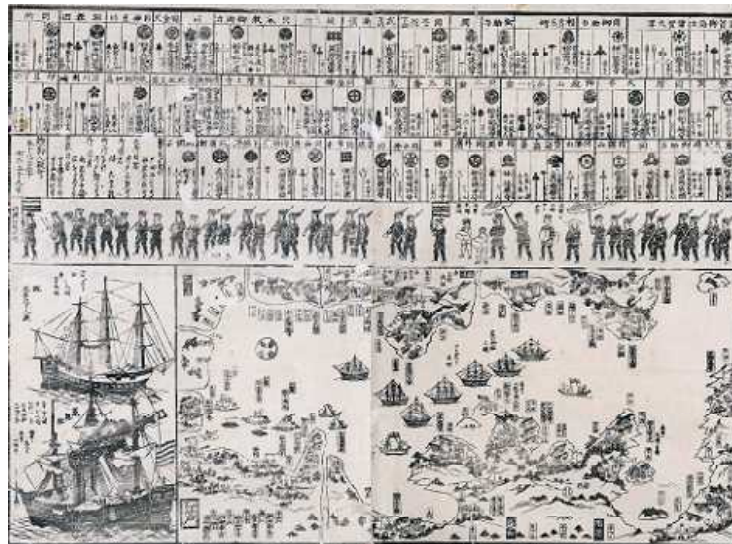
わせる物が含まれている。その一つに、世界地図がある(絵図1)。他にも、ペリー来航の様子を描いたと思われる絵図(絵図2)。蒸気船の様子や江戸湾で各大名がどのような防衛をしていたのか記されている。また、長州藩が英国と戦った長州戦争の絵図もある。京都へと出陣する幕府方大名の一覧図もあり、この中には、浅尾藩主の名もある。国防に関するこれら絵図が一般に流布していることが興味深い。小野家文書という主として「村の行政文書」で、いくぶん学者としての「研究書物」が加わるといふ印象があるのではないだろうか。しかしながら、絵図類は、それらを支えるいわば「教養」に関わる面を垣間見せる。村の行政者や天文学者という面とともに、小野氏が社会動静や「世界」に強い関心を寄せていた姿が浮かんでくる。改めて、小野氏や当時の社会に出会い直した感覚を抱いた。ツアー参加者の方々も文字で書かれた文書類よりも、視覚的にすばやく理解しやすい絵図の方に興味を持ったようで、「こんな田舎にこんな絵図があるなんて、この土地の印象が変わった」という感想もあり、ツアーの趣旨にいくぶんか貢献したようである。

ところで、金光大神の「世界」感覚をうかがわせるものに、「覚帳」明治八年六月十三日の条の「唐、天竺、日本」を画像化したものや「万国まで残りなく」(同十五年十月十四日の条)と

いう文言がある。これらは、「天地」という言葉と共に、金光大神が「世界」を思い描いていたことをうかがわせる。ではそれはどのような「世界」なのだろうか。先に示した幕末期の世界地図や絵図類は、金光大神が思い描いたであろう「世界」を私たちに想像させる。むろん、金光大神が小野光右衛門氏や四右衛門氏から見せてもらったかどうか分からない。絵図類にしてもいつ収集された物かも分からない。厳密に言えば、「小野家文書」という資料群の中に「在る」としか、はっきり言えることはないのだが、それでいて「もしかしたらそうかもしれない」という想像力(妄想力?)を大いにかき立てられる。有り体に言えば、「ドキドキ、ワクワク」させられるのである。

さて、すでに最近の紀要『金光教学』や『聖ヶ丘』にていくらか紹介している教祖関係の新資料の中には、「覚書」や「覚帳」には書かれていなかった金光大神の体験や家族に関する記録、社会の動静などが記されており、金光大神が抱いていた関心等を新たに知ることになると予測される。これらは、金光大神が見ていた「世界」、思い描いていた「世界」をうかがわせる手がかりとなってくるにちがいない。それは、これまでの資料の見え方にも影響を及ぼすだろう。一方で、これまでの資料からも、思わぬ「世界」との出会いの可能性を抱かせられる。思いもよ

らず交差する出会いと期待と妄想の中で、「ドキドキ、ワクワク」は止まる所を知らない。  
(大阪・大仁教会)



絵図2 『江戸湾海防図』(小野家文書、嘉永6年以降の作か—教祖40歳)



## ◆平成三十年度の計画◆

本年度は、研究生一名、新職員一名と共に、所長以下、総勢一五名にて出発することとなりました。以下、主な取り組みを紹介します。

### 【紀要論文講読セミナー】

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れられる方も意識した取りくみです。四年目となる今年は、三一〜四〇号の紀要の中から四本の論文を取りあげます。参加希望の場合は事前にご連絡ください。

場所—金光北ウイング(光風館研修室)  
時間—各日一三・〇〇〜一四・三〇

### 〈実施済み〉

第一回 五月一〇日(木) 担当・高橋昌之  
竹部弘「近世農民の世界観と金光大神の信仰」  
(第三八号)

### 〈予定〉

第二回 七月一〇日(火) 担当・白石淳平  
岡成敏正「覚帳」に見られる親子関係についての一考察—金光大神とその長男浅吉の生活史を中心として—  
(第三二号)

【第三回】 九月一〇日(月) 担当・堀江道広

金光和道「神前奉仕開始後の広前の周辺―東長屋・「宮」建築など諸経費支出の背景―」 (第三九号)

【第四回】 十一月五日(木) 担当・岩崎繁之

渡辺順一「諸人救済の視座―差別・暴力を視点とした「生神の宮」試論―」 (第三八号)

【第五七回教学研究研究会】(予定)

六月一日(金)〜一日(土)に第五七回教学研究会を開催します。本年は、「資料と信仰観、その関係性への眼差しⅡ―「信仰の場」をめぐる聖性と想像力―」をテーマに、第一日に所長基調講演、研究発表、第二日には、全体会(発題・コメント・討議)を予定しています。

【第一二回教学に関する交流会】(予定)

十一月一〇日(土)、金光北ウイングにて、「新たな教祖関係資料に触れる」(仮)をテーマに、第一二回教学に関する交流集會を開催します。霊地在住の方はもちろん、どなたでもご参加頂きます。

参加希望の場合は事前にご連絡ください。

【第一九回教学講演会】(予定)

布教功労者報徳祭時(十二月九日)に、紀要五八号の研究成果を題材にした教学講演会を開

催します。

この他にも、他宗教団の教学研究者との交流(教団付置研究所懇話会第一七回年次大会、於大本教学研究鑽所)や、学会・研究会を通じた一般諸学問の研究者との交流を通じて、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実に図ります。

また、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実に図ります。

これらを通じて、より一層、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えております。

【平成三〇年度研究題目】

〈第一部教祖研究〉

- ・教祖関係資料についての基盤的研究  
―研究資料「金光宅吉筆写帳面」の公開に向けて―  
所員 岩崎繁之
- ・金光大神直筆帳面類に浮かぶ「金神無礼」の位相  
所員 白石淳平

〈第二部教義研究〉

- ・語られた「老い」  
―信心をめぐる言語環境への問い―

所員 高橋昌之

〈第三部教団史研究〉

- ・戦災教会における「復興」とその諸相  
所員 児山真生
- ・川上郡吹屋町における近代化と教会  
所員 山田光徳



消火栓・消火ホース点検(5月)

★提

研究員

野中正幸

★言

## 真を求めて問う姿から教わること



私が研究生として教学研究所に入所させて頂いてすぐのこと、担当の先生から「終わらせようとするな」との言葉をかけ

られた。咄嗟に意味がわからず呆然とする私であったが、先生は「この言葉はどういう意味で使っているのか」「こう言えるのはなぜか」と私のレポートに次々と「赤を入れて」いかれた。一生懸命考え、書いたつもりであったが、あまりにいろいろなことを自明視して、前提を疑うことなく、無自覚に言葉を使い、形として整えて早く終わらせようとしていたことに気づかされた。どこまでその問いに向き合い格闘したか、というのを問われたのである。そして、たとえレポートを提出し、全て終わったとしても、そこで向き合ったことは、信心の問題としてずっと問い続けることである、ということも伝えようとされていたのではないかと思う。

その後教会に戻り、北九州教区機関誌である『北九州教区だより』の編集御用を頂いた。今年で八

年目になる。この機関誌に、教区内の信徒の方の紹介ページがある。以前は短い字数のものであったが、話を聞かせてもらおうと、その方の「信心史」、家族の「歴史」など多岐に渡り語られる。「これはちょっととした紹介に終わらせず、それぞれの『信心史』を描き、掲載することが、このお道にとっても大事なことはないか」という思いを持つようになった。

昨今の社会学、ライフ・ヒストリー／ストーリー研究において、聴取の方法論は様々のようだが、私はただじっと聴くだけではなく、対話によって共に新しい「意味」を構築していくようなあり方をいつも願い、うまくいくだろうかと緊張しながら信徒の方に会う。まずお話を聞き、時に同席されていく家族の方、さらに在籍教会の先生も交えて対話を重ねていく。近況から、信心のはじまりや思い出話など、様々に話は展開し、時に記憶や受け取り方の違いも明らかになる。立場や見方により描かれる歴史は違ってくる。私もできる限り「それはこういうことなのでは」と解釈し、話に加わる。「それは考えたことがなかったけれど、今そう聞かれて、そういうことであつたのかもしれない」と、対話により新たな気づきが生まれる瞬間も時にあるし、そのような解釈の方向へ導いてしまっているのかもしれないと自省することもある。

取材が終わると、音声をもとに原稿化していく。

字数も限られており、切り取りや解釈を重ねながらまとめていくことになる。なんとかあの対話の場の豊かさを誌面に表したい。そう思うのだが、締切は目前に迫り、時間に追われ、バタバタと形を整えようとするようになってしまふ。

その時に思い出すのは、「終わらせようとするな」との、あの時の言葉だ。締切間際の苦しい状況であるが、立ち止まり考えさせられる。どの方のお話もそれぞれに固有の、再現不可能な、実在した尊い信心の歩みである。そこにどれだけ向き合えたか。また後世、誰かがこの誌面に出会い、何かを受け取るかもしれないし、家族の信心を求める誰かの一助となるかもしれない。終わらせようとして、語ってくださった物語を問いとして受け、こちらにも実意で書き表し遺していく。そのような応答責任を感じてくる。

以上の「問い続ける姿勢」「書き表し遺すこと」等、これは私の編集御用に関わる一例であるが、日々の御用の様々な場で、教学研究の成果・内容のみならず、研究姿勢や真を求めて問う態度・向かい方を通して、大事なことに気づかされ、立ち止まり考えさせられている。その経験は、信心のありがたさ、深み、さらには「真の助かりとは？」との問いに、改めて出会わせてくれるものである。現在、研究所で進められている、交流や学び求める合う場づくりへの取り組みが、より一層広がっていくことの大事さを思わされる。

## 研究所の思い出

### 「研究を求める眼差し」はいつまでも

元助手 末永正次



早いもので退所してから十七年になりました。私が在職していた期間は一年と四か月ほどでしたが、

研究所で体験したことはかけがえのない財産です。当時、所長であられた佐藤光俊先生をはじめ研究所の諸先生方には、ただただ感謝の言葉以外ありません。本当によくぞ私のような人間と温かく関わってくださいと思います。

当時の私は、研究所の人間であるにも関わらず活字を見るのが億劫で、ろくに本も読みませんでした。休日ともなれば他の方々は寸暇を惜しんで、それぞれの研究を進めたり、関心のある書籍に触れたり、限られた時間を有意義に使う工夫と努力をされていました。しかし私の場合は「休日はしっかりとつるぐもの」という、必要性の全くないポリシーを持っており、「アリとキリギリス」を地でいくが如く、ただダラダ

ラと遊興と楽なことにふける過ごし方をしていました。その上、私はかなりの大飯喰らいで諸先輩方からは「銀シャリ野郎」という結構なあだ名も付けて頂くほどでした。

このような感じで「研究者」としての雰囲気はかけらも無いような私でしたが、検討会等の場で指摘や批評を受けるとムキになって抗い、諸先輩方を呆れさせてしまうような場面もありました。余りの怠けぶりと無知さ、傲慢さに当時のことを振り返ると慚愧の念に堪えません。

このままではいけないと尻に火がつきかかった時分に亀有教会への後継が決まり、研究所に對しては心残りを抱えつつ今に至っております。そんな中、少しでも研究に関わっていきたくの思いで、金光教関東布教史編纂委員会に所属、「東京都教会連合会」「取次運動と東京布教」という二つの研究課題を与えられ、教会御用のかたわら細々ながらも研究を進めさせて頂いております。また首都圏布教百三十年にあたる今年には、金光教首都圏フォーラムから『あつまの道のいしすゑ』という、十年毎の首都圏布教のお年柄に出されている冊子が刊行されますが、その編集員としての御用もさせて頂いております。何のご恩返しもできませんが、「研究を求める眼差し」だけは持ち続け、せめてものお役に立たせて頂きたいと願っております。

(東京・亀有教会)

## ニューフェイス

研究生

瀬戸望(岡山・入田教会)

「つくる」という行為を尊敬し、また楽しみとして生きてきた私は、学生時代は美大に通わせてもらいました。「つくられたもの」を受け、自身も「つくる」ことを楽しんでいましたが、残念なことに私は人間関係をつくり、維持することが下手くそでした。ごまかしごまかし生きてきたのですが、大学では通用しませんでした。結婚を機に金光教徒となり、よく知らないまま教会で生活していくのは厳しいだろう、と学院へ入学しました。その学院は寮生活です。学生時代の不安がよぎりましたが、結果的には学院での人間関係を楽しむことができました。それはもしかしたら学院生同士で「金光教という宗教を共有している」という少し特殊な意識が前提にあったからなのかもしれません。学院で過ごす中で、金光教は私にとって大事にしたいもののひとつとなりました。その中でもぼつぼつとわく疑問や問題を材料に、研究などのかたちで「つくる」を行う研究所の方達から、分野を問わず日々たくさんものを得ている今を大切に過ごしたいと思っています。

# 追悼 前田祝一先生

## 前田祝一先生の思い出

所長 大林浩治



昨年の八月、前田先生が御国替えされました。少しばかり、先生の思い出を語ってみようと思えます。何しろ、私ぐらいしか、先生のことを具体的に知っている古い人はいなくなったものですから。

とはいえ、先生とは同じ但馬の出身で、ご縁も深かったといえるでしょう。会食でお隣に座らせ

て頂くと、私の祖父の思い出話をして下さったり、地元のうまいどぶろくの話で盛り上がったものでした。またそんな話を聞く私には、おそらく先生がそこで思い描いておられたろう地元の風景が心に浮かんだりもしていたのです。

六月になり、教学研究会を迎えようとしていますが、先生がそこにおられないのだなと思うと何だかさみしいんですね。あの飾らない、顔をくしゃくしゃにされながら、うつむきがちに訥々としゃべられる姿が見かけられないなんて。

先生は、自分をちっぽけで欠点だらけの人間だと認めておられているようでした。必ず発言の最初と最後には、「おおざっぱな話ですが」とか、「ちよつと、とんちんかんなことを申しました」とかいった言葉が入っていたのが印象的でした。そんな先生の話は、決して明晰な論理立ったものじゃありません。むしろ、たそがれの中を歩きながら話している人の言葉のようであり、人間の悲哀や貧乏くささや無鉄砲さなどが、ぼんやりとおかしみを湛えられて語り出されているように聞こえたものでした。「ひと口」で言えないことを最も大切にされていたのだと思わされます。訥弁は雄弁よりも人の心に届く、そんなことを考えさせられます。

先生が晩年、気にかけておられたのが、折口信夫の歌でした。それは、「人間を深く愛する神ありてもしものいはば、われの如けむ」というものです。これは、養子を硫黄島でなくした折口が、深

い悲しみのなかで作った歌です。先生は、この歌にこと寄せて、人と神とが心を通わす意味を、次のように仰っておられます。

「あのう、この折口の言う「心」は、太古の日本人というか、人間の心と言いますか、岡野弘彦氏が折口信夫の五十年祭の祭詞『すばる』(二〇〇四・二)でも奏上してましたが、「仏の教を知りそむるよりもさらに前の世の、神も仏も頼むべきものとは、何ひとつなき劫初(よのはじめ)の、やるかたもなき寂寥の極みにありて、おのづからさとり得たる、生きとし生けるものを、愛しみあわれみつつ、共に栄ゆべき心」なんでしょう。その心です、ね、あやまち多い人間のかたわらにあつて、離れがたい懐かしみを寄せてきた神がおられる、そのことが歌われたんでしょう。これは、まあ、太古の昔から今日の金光教にもつながっている、と言ったら、まあ、どうでしょうか。：、「親神様のお心は、かわいいの一心ぞ」と教祖様がおっしゃっておられますが、そこには、痛切な悲哀が重なってあるんじゃないかと思うのですが。で、そのところから生まれる神のあることが、教祖様のご信心から窺える気がするんですが、え、まあ、そんなことを：」

これは、第四十七回教学研究会でのご発題の一

部です。この時のテーマは、「立教一五〇年を迎えるにあたって」というものでした。

冒頭、先生は、気恥ずかしそうに「ちよつと、あがっています」と言われ、「ちよつと大学を定年退職したばかりでして」とか、「頭も潤んできてしまつて」とか、「自分の思っていることをテーマ化することがなかなか難しくつて」とか、いろいろ言い訳を述べられます。これは毎度のことなんですね。そして、テーマとなった「立教」といったことがらについては、「直接には、取り上げられていなくてすみません」と仰つたのですが、しかし、この発言を見れば、「どういう道として金光教が立ってきたか」が言われているのがわかるでしょう。きっと先生の目には、金神と接する教祖の姿が映っていたでしょうし、この道の始まりを、神と関わる「心」の問題として語っておられたことがわかります。

あれから十年、立教一六〇年を迎えようとしています。そんな中で、「立教」といった言葉、概念に関わる分析的な考察は、ある意味、大事でもありません。しかしそんな考察が、すぐさま、「何がいけない」「何がどうあるべきだ」といった大声の真実としてまかり通るようでは、何かおかしい気がします。それに比べ、ここでの先生の言葉は、ただそのように生き、そのように死んでいった、太古からの人の世にあつて、「まっすぐにしやんと立った」この道であることが語られているように思えるのです。



第43回紀要掲載論文検討会にて(右端)

教学研究会での、恥ずかしそうに顔を上げずに乾杯のご発声をなされる姿が懐かしく思い出されます。おかげで、残された先生のお写真は、みな下向きです。また夜には、姫野先生と学生時代の立場の違いを熱く語っておられたことも思い出されます。へべれけになつても、「一人で大丈夫、私は旅慣れていきますから」と駅のホームでぐらつく先生も懐かしい。

先生が亡くなったことを国際センターの河井先

生にメールで連絡した際、「名物がなくなつて寂しい」と書いてしまいました。その気持ちは私だけではないでしょう。

それにしても、お酒好きな先生に、一つだけお聞きすることが出来なかつたのが残念でなりません。なので、霊となられた先生に聞いてみたいと思います。

「あの、地元、神鍋かんなべのどぶろく、あれ、どうすれば手に入りますか？」

### 前田先生と政治倫理 若き日の先生の熱情にふれて

何気なく『金光教徒』を見ていたら、前田先生の文章が載っていたので、ここで紹介させて頂きます。多感な青年期の前田先生に会えるようです。一九六〇年(昭和三五)七月一日の記事です。

でも、その前に、当時の世相を知っておいた方がよいかも。この時期、ベトナム戦争の真つ最中。日本では「新安保条約」が採決され、米ソの対立にあつて日本の前線基地化が決定づけられます。それに反対する「安保闘争」で東大生の権美智子さんが死亡したのです。前田先生が専攻していたのはフランス文学ですが、そのフランスは、この年、サハラ砂漠で原爆実験をしています。事実

上、核保有国となったのでした。

世界的な規模でわき起こる学生運動、そのなかで前田青年は何を考えていたのでしょうか。まさに「政治の季節」への突入。無条件降伏の上に成り立った戦争放棄の精神が、政治問題として試練にあっています。こんな時期に先生はこの文章を書いていたのです。

読んでいただくと、若き前田青年の教団現状に対する苛立ちをみる事ができるでしょう。口角泡飛ばす論調には、私たちが知っている穏やかな先生の印象とはずいぶん違っていると思われるかもしれません。若書きの文章ですし、当時の学生ならではのテンションも感じられます。でも、ここには、なお考えさせられる問題があると言えないでしょうか。平和が、政治上に取り上げられていくとき、私たちは、その政治上で問題化したことに、どういう信心への態度で臨まねばならないかと。

読んでお分かりのように、「政治性を信心に導入せよ、政治的立場を確立せよ」といった単純な提起ではなさそうです。ましてや、いわゆる「右」とか「左」とかいった政治的立場を取ることを言うものでもありません。そうではなく、そのことへの無関心の態度が何より問題だとされています。先生の言いたいことは何でしょうか。すでに現下の政治が問題となつて、私たちの生命に強いて来ているのではないか。それに目をそらしたままで、果たして信心と言えるのか、教団と言えるのか。

こんな言葉で言いたかったのは何でしょうか。

読んでいくと、生きた生活が根こそぎ台無しにされた歴史を踏まえ、それを信心の問題として引き受けるあり方を、信心が存立する上での人間の務めとし、「政治的倫理確立の必要性」として提起しておられることがわかります。信心は、政治の域を超えたものでしょうし、そこには信心と政治を別つ一線も必要でしょう。しかしそれは、政治として問題になることを、信心は信心として引き受け直し問題にしうる、反措定的な意味での政治的倫理があつてこそ。それなしに政治と信心を別つ一線の必要性を知ったことにならないのでしょうか。どうもこれが一番に仰りたかったことのように思われます。

このことは、信心への熱情として、先生の生涯を貫いていたもののではないのでしょうか。ちなみに、信心を「文学」に置き換えると、たちまち、先生が文学へ賭けた思いになつていと理解できるでしょう。



## 本教における 政治的無関心さについて

前田祝一

本教は現在政治に対して一切関与しないという態度をとっている。しかし、敢えて私は、現実の日本の政局の混乱、世界冷戦の不安を、目の前に見、皮膚に感じながら、その態度を検討してみたいと思う。

### ■ 宗教と政治とは別か

そもそも教団が政治に一切関与しないとはどういうことだろうか。政治に利用される愚を、あえて犯さないということだろうか。それとも、政治を利用するのは、その過程において、宗教の本質をおろすと失つてゆくことだろうか。或いは、政治とは別の領域に宗教が属しているからなのだろうか。

いずれにしても、宗教は現実の中で生き生きと生命をもつていなければならないのは当然である。即ち、具体的には、一方で個人の内的生活に片足をかけ、他方では外的生活に倫理としての役目を果たしながら、互いに緊密に関わりあつて生きていなければならない。少なくとも歴史に生き残っている宗教は然りである。本教においても、いろんな形をとつて生活倫理が生み出されてきたのは事実であるし、逆



に、社会的には、この生活倫理に支えられて、その一つの位置をしめてきているとも云えるのである。即ち、現実の社会の中で、本教独自の存在理由をもってきたのであり、しかも常に、自己自身の宗教的内的闘争によつて、エネルギーを発散し続けている倫理、そういう意味で常に現実の中に生きている倫理を生み続けてきたのである。

### ■ 陰者の宗教

かかるとき、教団が、「本教は一切政治に関与しない」という態度をとるといことは、一体どういう意味をもっているのだろうか。現実には、果たして政治に関係しない態度があり得るのだろうか。私には、かかる態度が、大戦中の本教教団のあり方に対する反省と、戦後の混乱に対処する一方法として、打ち出されたと思われぬのである。しかし、反省をへて生みだされたと思われる政治に対する無関与のこの態度は、戦前において、本教団の取った方向と全く逆の方向である。即ち、かつての本教団のこの態度を、政治に対してべつたりと密着していた御用宗教のあり方とするなら、政治に対して無関係であることを宣言するこの態度は、逆に、本教における陰者の宗教のあらわれとみることもできるかもしれない。当時混乱期においては、この態度はやむを得なかつたかもしれない。しかし、戦後十五年を経て、なお、かかる態度が、何ら無反省にとられてい

るとしたら問題である。一方の極から、他方の極へと簡単に態度が移り、なおその理由が、宗教本来の姿に帰つたまでと、かたつけること自体が、すでに、かつての反省と戦争責任の問題が十分に徹底していなかつたことを示す以外の何物でもないのである。

### ■ 無関心は排斥すべし

「政治がいくら変わつても、宗教の本質は変わらない。」とは、よく聞く言葉である。しかしこれ程安易な言葉がどこにあるか。ファシストは宗教を利用するか捨て去るかいずれかである。その時、果たして、本教は政治に対して無関係であると云つていられるだろうか。かかる時にもなお、本教が主體的に存在する為には、一つの立場を確立しておかねばならないのは当然である。その根底を成すものが政治的倫理なのである。

我々は、先にのべた二つの態度、即ち政治に密着した態度と、政治的無関心の態度を強く排斥しなければならぬと思う。そしてその二つの間に立つて、一つの政治的倫理を確立する努力をなさねばならない。これがないからこそ、先にのべた二つの極端な態度をとらざるを得ないのである。即ち政治に対する基本的態度は、そのどちらを考へても、要するに無関心であるとも云えるのである。そして「政治には一切関与しない。」とは、決して政治に対する態度決定ではないのである。それはまさしく、政治倫

理を生み出す努力のない言い訳以外の何物でもないように思われるのである。

### ■ 政治倫理の確立

宗教が、一面社会的存在である限り、倫理を生み出すという仕方でもつて、社会に対してその責任を果してきたのは、歴史をふり返るとき、明らかに認められることである。

我々は今、幾多の本教的生活倫理を受けついでいる。しかし、我々は、これらに今日の時代の中で新たな生命を吹き込みつつ、それをより発展させて、一つの政治倫理の確立をめざさなければならぬ。要するに、政治に対する深い認識と、教団としての立場の確立、その為の政治的倫理を生み出す努力、かかるものない教団は少なくとも社会的に怠慢である。何故なら、人間社会における一集団は、明らかにすべての人間に対して集団としての責任を持つているからである。

(東京都立大学仏文学専攻学生)

おまけ。同じ欄に荒木美智雄先生も文章を載せています(「自分のあり方」。荒木先生の方は、よりナイーブな自分への問いかけです。「わたくしがあるのは、何においてであるか。わたくしが生きるのは何によつてであるか」と。

## 平成二九年度 研究報告座談会

## 資料と、その向こう側

## 〈ここからの教学研究所を想う〉

日時——平成三〇年三月一五日

出席者——岩崎繁之、白石淳平(司会)、山田光徳、須寄真治、森川育子(記録)、堀江道広、小玉さつき



## 司会

教祖直筆を含む新たな資料群の提供により、近年、本所の研究状況が大きく動き始めています。また本年度は、大林所長のもと、新たな体勢での研究所がスタートすることにもなりました。そこで

本日は、この度の研究報告検討会を手がかりに、ここからの教学研究に想いを巡らせてみたいと思います。

皆さん現在の動向を意識しつつ臨んだ今回の検討会だったと思いますが、それは同時に、「教学研究って何だろう」と問われるような経験でもあったように思われます。その点、今回初めて参加した人はなおさらのことだったんじゃないですか。

## 小玉

私は、昨年の五月から事務室と資料室での御用を頂き、今回初めて参加しました。提出日には、目の前に積み上げられていく研究報告に正直面食らいましたし、実際手に取ってみても、言葉の分か

らなさにつまずきました。でも、研究者の皆さんのことをもっと知りたくって、辞書片手に苦戦しながら読み進めて検討会に臨みました。なんとか体当たりの質問をしてみたりしながら、皆さんそれぞれの関心や注目点の違いが見えてくると、「分からない」が、少しずつ「面白い」「楽しい」になっていったんです。検討会を通じて研究所らしきに出会えたことが嬉しいです。

## 堀江

「分からない」が「面白い」になっていくというのが、研究所ならではのよう感じますね。僕が印象的だったのは、検討会の時に意外とたじたじな先輩達の様子。でも、それでいいんだって思わせて貰ったというか。研究してるからこそその、分からないさ、答えられなさ。それも、研究の面白さなんだなど。



僕は初めて研究報告を提出したんですが、教祖直筆の帳面(「金光大神直筆帳面1」と格闘しながら、最初は何が書かれているのかも読めないところから始めて、記述の前後や背景を調べながら読み進めていくうちに、この資料って凄いなだなんて思えてきて。会ったことのない教祖が急に身近になってくる。それは、研究によって「分からない」と首をひねりながら、それが「面白さ」になっているというよう。資料が自分を動かしているという感覚があります。

## 須寄

今回、教祖研究は三本とも、かたちやウエイトはそれぞれだけど、新資料を扱ってましたよね。そんな動向を見て、教団史の自分も、教祖のイメージが変わってきてるなという実感があります。それは、以前にも増して、いっぱい「書いてる」人だっという印象。そして特に、新たな帳面類を資料論的に分析した岩崎報告からは、既存の「覚帳」や「覚書」も含めて、資料が残っているということ

自体の意味を、改めて考えさせられます。

自分は明治三八年の教会長講習会の講義録に注目したのですが、それが何故、どのようにして残されたのかと考えていくと、内容もさることながら、行間に付された書き込みや訂正、またそれらから浮かぶ作成過程といった、資料の成り立ちへの関心も生じてくるんですよ。

**司会**

ただ資料があるわけではない。何故あるのか、どうあるのか。それを丹念に描いていけば分かることと、それでもなお分からないことがある。検討会の初日に、大林所長はそんなニュアンスの挨拶をされたけど、それは、今見えているものからもう一步、考えてみないといけないということだと。何がそうさせているのか、何によって面白いと見させられているのか。

**山田**



そうなんですよね。基づくべき資料があるからこそ、その向こう側にあつて、資料をそう見させている「何か」の方に目を凝らさないといけない。それは現代社会かもしれない。自分が生きている生活感覚かもしれない。

高橋報告が取り上げた「老い」や、児山報告の「連合会」、そして僕の「教会」への関心のあり方だって、今だからこそ現れてきてるんだろうと思うんです。だからこそ、そんな今にあつて、新たな資料が登場してきたことのインパクトは大きいと思いますよ。時代社会のうねりに

リンクした資料環境の変化のように感じられて、ワクワクと同時に怖さもある。その意味でも、どのように、どのような資料としていく教学研究なのか、ここから一層問われていくんだと思います。

**森川**

そこからすると、吹屋（現岡山県高梁市成羽町吹屋）という土地に注目した山田報告は、新たに資料を探索したり、あるいは現地

踏査したり、アグレッシブな動きとして見えてきますよね。

**山田**

直接の資料があまり無いというのもあつて、今回、自分で現地に突撃してみたんです。そういうのやったことなかったんですよ、実は(笑)。でもいざ行ったら行ったで不思議な出会いがあつて。いろんな方に話を聞いていく中で、お姑さんが吹屋教会に参つてたという方に、最終的に辿り着いたんです。それで昔の話を聞くことが出来て、教会跡地が分かったわけです。「ああ、逃れられない」と思いながら帰路にいたんですが、大なり小なり「何か」に出会ってしまったような気がして。それがモチベーションになったなと思います。

**司会**

資料はどう生まれていくのか、山田報告には、そのライブ感がありましたよね。その点、教祖関係の新資料についても、まさにそういう瞬間に立ち会わせて貰っている感じがします。おそらく「覚書」や「覚帳」の登場以来の、希有な状況なんじゃないか。そしてだからこそ、今まで「当たり前」に思ってきたことも含めて、もう一度新しく出会うていくことが出来る地点に立てる。それは、現代がそれを促しているのではないかというくらいに。その意味では森川報告もまた、本教の「当たり前」に問いを向けていく研究なんじゃないでしょうか。

**森川**



私は儀服審（儀式服制等審議会）の委員会資料を取り上げました。資料を通じて、「広前」や「取次」をはじめとする、私たちが当たり前に使っている言葉について改めて検討していく必要性を思わされます。

ところで、奉斎様式等をめぐる議論では、やはり教祖まで遡って検討されるわけです。そこで「覚書」が論拠として出てくるんですね。今

回の研究報告では、岩崎先生や白石先生に加えて、嘱託の渡辺順一先生も「覚書」を取り上げておられました。それもあって、改めて「覚書」って何だろうということが気になってきました。どこまでも言葉にしきれない「何か」がある。それは、分野や領域をまたいででも、一つ一つそれを確認していかないと。その関心や必要性を皆で共有できるのも、今というタイミングだからなのかもしれないね。

### 岩崎

そういうえば、小玉さんは検討会で、高橋先生に向かって「教義って何ですか」、児山先生に向かって「教団史って何ですか」って聞いていましたね。各分野の担当部長に、直球勝負



で面白いこと聞くな(笑)、と思ったのと同時に、本当に大事な質問だなと思いました。実は、そういうことは意外と言葉にされてきていないんじゃないかなあ。聞かれる、問われることによつて、言葉にしようとする。言葉にするために思考をフル回転させて整理して。そして皆でそれを聞く。全員にとつて貴重な経験を、あの場でしたんじゃないでしょうか。それは、資料が何故資料なのかという問いにつながっている。資料としているものの手前で、何故研究所があるのか、何故研究しなければならないのか。そこをひっくり返して問われた気がしています。

### 小玉

資料室での複写の御用を通じて、資料に触れることは多いんです。でも、見ただけではその資料がどの資料分類に属するものか分からなくて。教祖とか教義とか教団史とか。それを見て自分の中では「あ、これもしかして教祖かな」とか思って複写していくと、実は違ふとか。それで、自分なりの資料との出会い方というか、楽しみを最近見つけたんです。



例えば、ある会合の資料を複写してて、中身を見ても、あまりの訳の分からなさに、汚れとかだけ確認するようになったり。でも、研究者はそれに資料として向き合っていると考えたなら、研究ということのすごさを感じました。それで、検討会でお話をうかがったことで、複写した資料が、生きた研究の資料になるんだっていうことを改めて思わされて。見方が変わるといふか。

### 司会

それはすごい経験ですね。文字が書かれている紙、モノとしての資料がある。そして、それに資料として向き合う研究者がいる。モノとしての資料づくりに携わってくれている人が、研究の資料になる、という見えない意味にも出会ってるんですね。

### 堀江

僕が取り上げた「帳面1」は、既に五七号大林論文で部分的に取り上げられている資料です。今回は、それを一から読みながら、全体的にデータ化もしつつ、作業や分析に取り組みました。そこでは、資料のあり様が文章になっていくようでした。それは、今まさに自分の研究を通して一つの資料が生きているんだな、というように。

### 山田

森川報告もそう。儀服番の資料を見た人はこれまで何人もいたんだろうし、僕も少しは見た。でも、森川さんの態度で掘り起こされる面白さがある。それは、初めてそこで資料になるうとしている瞬間を迎えているんじゃないかなという印象を持ちました。議事録とか議会の発言も、その発言者が意図していた以上の歴史の意味を読んでもしまう森川さんがいる。それは、その議事録が今に残されてきたことの意味自体にも関わっている。さらに言えば、現代から掘り起こしてはじめて、研究の資料になっていくという面もある。単に歴史事実として確認して、「こんなありました」っていうのだけじゃない「何か」は、こちら側、今という時代の方にも問われるも

のだろうし。

**岩崎**

そういう意味でも資料環境の変化は、研究の関心、方法、視点に、やはり影響を与えてくると思います。新たな教祖関係資料が出て来て、そこからは、「覚書」「覚帳」ほどには、神のお知らせや信仰世界といった雰囲気は感じられない。一方で、社会状況とか日々の生活とか、人間的な様相がどんどん出てくる印象。そこから、現実社会の中で、信心の言葉がどう生まれようとしたのか、どう言葉が言葉に、どう信心が信心になろうとしたのか、そしてそれはどう支えられてきたのかを考えさせられています。

**須崎**

今回、資料の成り立ちに関わって、その収集経緯などもうかがっていくうちに、「研究所の営み」みたいなものも頭によぎってきます。それは、堀江君が言った、自分が見るのではなく見させられるということにもつながる。研究が意志をもって、自分がその指示に従っているみたい。これまでの研究の歴史の流れ



とか、先行研究を踏まえるという面だけじゃなくて、何か大きな流れの中に自分が組み込まれていくというか。それが、先輩達から聞いてきた、「呼ばれている」ってことなのかな。自分が意図する以上のものに出会っている感覚。資料が研究所に来て、数々の人の手に触れながら、ずっとここに在り続ける。それでいて、自分が

初めてその資料に出会わされたのかっていうように。

**司会**

「研究所の営み」として、教祖・教義・教団史というそれぞれの研究領域も、お互いに乗り入れながら議論していくなかで、個々の領域として何を考えるべきかを、より意識させられる今回の検討会だったように思います。そしてその営みも、須崎君の言うような大きな流れとして見ると、大事なことを確かめるといよりは、繰

り返し確かめ合っていくことで大事になっていくのかもしれない。本日のこの場合も含めて、確かめ合い続けることで大事にしていく、研究にしていって、資料にしていって。その意味で、未来の教学研究は、今、ここからはじまっていますね。

まだまだ話題は尽きませんが、本日はありがとうございました。



## 紀要論文講読セミナー に参加して

平成二七年から、これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催してきています。参加された方に寄稿していただきました。

### 紀要論文を大切に

佐渡教会 石塚康実



教会布教の現場と、自身の信心の在り様を問題にした時、自ずと求道が生まれてくる。とても教学研究という域の高い所へは行かないが、日々の信心生活が教祖様の開かれた、「神が助かり氏が立ち行く・実意丁寧神信心の道……」にどう繋がって行くかを、考え求めさせて頂きたいというのが願いである。

教学研究に携わる方々がこのお道の為と、わが身の信心を醸成するために日夜に渡りご苦労

下された紀要論文が、ご本部大祭時にお下げ頂いている事が有り難く、昭和二十三年からの第二号（一号は不明）〜今日まで、興味や関心のあるものを中心に楽しく（難しいが）読ませて頂いている。この研究紀要論文は、地道な活動であり中々表舞台には出ないかもしれないが、本教信仰の土台をなすものであり、建築で言えば捨てコンクリートのようなもの、是がしっかりとっていないと高い大きな建築は出来ない。教師一人ひとりの信心の土台となる内容である。学院では学びきれない内容、自己研修を行うのに最適な教材だと思う。この紀要が積ん読でもったいない。教師一人ひとりが大切に読ませて頂きたいものである。

このセミナーで取り上げて頂いた、金光眞整論文、「金光大神御覚書の読み方について」、福嶋義次論文の「理解」のことばについて、「一乃弟子もらいうけをめぐる金神と天照皇大神との問答」、「死を前にした金光大神―「身代わり」考―」、竹部教雄論文の「実意丁寧神信心」考、……。難解なものもあり、このセミナーが開催される案内を見て、ご都合を頂き参加させて頂いた。私の考えと共鳴したり違ったりで、お話を聞きながら場違いな発言にも関わらず、受け止めて頂いた事がとてもよかった。又、高齢の信徒の方も東京から熱心に何回も参加頂いている姿にもふれ、教師として頑張らねばと思いを

新たにさせられた。

教会現場で取次の御用の中で、又、自らの信心生活の中で大切にしている事の一つに、教えやお話は情報ではないという事、その人の生きる力になり得てこそその教えであり、お話でなければと心しているのだが、その元にあるのは「自分自身の生き方」ではないかと思わされている。いいお話を聞くと、それを誰かに聞いてほしい、聞かせたいという思いが強くなり、自分自身の生き方とは関係なく話をしていく自分に気が付く、という事が多々ある。

教学研究は、本教信仰の大切な処を明らかにしていく研究、大切な営みであって、教会現場の教師は、教えを生きる事、教えに生きた助かりを話すのが取次であり、教話でありたいと願っている処である。中々難しい所だが、情報化社会の流れに流されない様、情報としての信仰ではなく、生きる為の信仰を求めているものにとつては真に有り難く楽しく、今後共、紀要論文講読セミナーの、参加者の一員でありたいと願っている。

（新潟・佐渡教会）



# 思いつくままに

佐渡教会 石塚陽子



「〓紀要論文と一緒に読んでみませんか〓初めて読もうとされる方、大歓迎です」というお誘いの言葉

にとっても感動しました。

学院を卒業しても自由に教学としっかり向き合い、本教教学のことを学べることは近年少ないと思っていました。

参加してみても、こんな楽しいところはない！というのが第一番でした。二十代の頃、研究所に六ヶ月研修生として勉強させていただき、自分の論文のあいまいさや物事を論ずるだけの中味もなく、悪戦苦闘した日々。英語よりも難しい金光大神様の直筆の読み下しは、分からない事がいっぱいでしたが、内田守昌研究所長、竹部教雄部長はとてやさしく、分かりやすくいろいろなお話を下さり、研究所の先生方にお礼申し上げます。竹部教雄先生から「神に意志があるか？」と質問を受け、答えを先生は言われぬままにお亡くなりになりましたが、私は今も先生と心で会話をしています。

一月一五日(水)立教記念祭時「死を前に

した金光大神―「身代わり」考―(紀要「金光教学」第二八号、一九八八年)を対象に高橋昌之所員を担当講師として開催されましたが、参加することができず、とても残念です。私も「身代わり」に大変興味があります。「身代わり」の問題と共に「死」をどのように捉えるかという点も重要ではないか。そして、「死」は「生」を生み出す。「天地」が絶えず命を生みだすべく働き続けていることに目覚めさせられることを、この「生」「死」を通して感ずることがあります。

「死」を通して、次の生命の種を遺すといわれます。もつとゆっくり「天地」の生命のあり様を分かせていただきたいと思います。

今日、教学は信心するのにとっても大切なことだと思われます。セミナーに参加させていただき、自分の信心のあり様、色々な問題に出会われた方々とお話をきかせていただき、どこに視点をおいて生きていくことが大切なのか。ということを考えさせられます。自分が助かり人のことも自分のこととして、心がゆらぐことなく楽に生きていけることを有り難いと思っております。セミナーはこのまま続けて下さい。参加していませんがファンもいます。

(新潟・佐渡教会)



紀要論文講読セミナー第1回(5月)

# 彙報

(平成二九年六月一日  
～三〇年五月三一日)

## ▲ 人事関係 ▼

### 一、職員(教団職員)

○所長竹部弘、六月三〇日で任期満了。○教師大林浩治、七月一日付で所長に任命。○所員岩崎繁之、七月一日付で部長に任命、第一部長に指名。○所員白石淳平、七月一日付で助手に任命。○教師堀江道広、一〇月一日付で助手に任命。○助手北村貴子、十一月一〇日付で辞任。○助手藤井千枝、三月三一日付で辞任。○主事千田一真、五月八日付で財務部(経理室)に異動。○財務部(経理室)部員柏原正一、五月八日付で事務室に異動。○書記小玉さつき、五月九日付で主事に任命。

### 二、研究生

平成二九年度  
○研究生藤井浩志、同堀江道広、九月三〇日で委嘱期間満了。  
平成三〇年度  
○教徒瀬戸望、五月八日付で研究生を委嘱。

### 三、嘱託

○教師竹部弘、七月一日付で嘱託を委嘱。

### 四、研究員

○研究員佐藤武志、十一月三〇日で委嘱期間満了、翌二月一日付で再度委嘱。

### ※五月三一日現在

所長一名、部長三名、幹事一名、所員一名、助手三名、事務長一名、主事四名、研究生一名(計一五名)、嘱託八名、研究員八名、評議員四名。



研究生入所式後、客殿前庭にて  
(前列右より柏原正一、所長、瀬戸望)

## SAKAMICHI

今号も無事発行することができました。執筆のお願いを快くご承引頂き、寄稿して下さいました皆様に御礼を申し上げます。

さて、浅口市は、本所の客殿、洋館、付属舎を登録有形文化財として申請すべく、目下手続きを進めています。本所の施設が、金光教のみならず、公的にも重要な歴史的建造物と認められることは、大変意義深く、ありがたいことだと思います。そうとは言え、施設を使わせていただいている立場上、これまで以上に、維持管理の責任は大きくなってくると思います。

研究所には、消火栓が、都合三箇所に設置されています。幸いにして、これまで実際に使用が必要な場面はありませんでしたが、いざという時のために、常日頃からのメンテナンスは欠かすことができません。

先月、消火栓と消火ホースの点検を兼ねて、全職員で、放水訓練を実施しました。初めて消火ホースに触れたという職員も多く、施設保全意識の醸成に一役買いました。<sup>(た)</sup>

発行・印刷 金光教教学研究 所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五)

四二一三一一七

FAX (〇八六五)

四二一三一一九